
IS(インフェニット・ストラトス) 勇者光臨

ガオガイガー最高！ジェネシック最高！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフェニット・ストラトス
IS 勇者光臨

【Nコード】

N9410Y

【作者名】

ガオガイガー最高！ジエネシツク最高！！

【あらすじ】

君達に最新情報を公開しよう彼の名は獅子王 聖心彼は彼女とのデート中に彼女を助けるために死んだラストは口付けで彼の人生は終着駅に着いたが彼は神によって転生を果たす

そして我等が勇者 獅子王 凱を相棒に

IS世界に勇気を巻き起こす

そして彼は勇者王を操る勇者となる

インフェニット・ストラトス
IS 勇者光臨

君もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

俺と凱

ズズズツ・・・ゴ・・・クツ
適当に店で買った紅茶を飲みながら新聞を読む
・・・よし宝くじ1等当たった

『今さり気なく凄い事言つたよな?』

「そうか? あつ2等と3等も当たった」

『・・・牛丼食べて良いか?』

「宝くじから一気に牛丼かよ!？」

俺の名は獅子王 聖心

俺の名は親が本当は清らかな心で清心としたかつたらしいが
間違えてこうなつたらしい

因み牛丼の話をしたのは俺の相棒 獅子王 凱だ

つつても凱はISのAIだがGストーンの力を使って実体化が可能
何それ恐い・・・

因みに俺は前世の記憶がある
いわゆる転生者だ

はいはい皆様うわぁ・・・有りがちとかお思いでしょう?
それは作者に文句言つてください

まあそれはさて置き俺はなんと彼女とのデート中に彼女が車に引か
れそうになつたんで

俺が思いつきり突き飛ばして助けては良いんですけど
代わりに俺が死にました

で・・・最後に深くて熱いキスをして俺は息絶えました
ほんでお次は目を開けたら土下座してるじいさんがいました

俺はなんか死ぬはずじゃあなかったの俺はIS世界に転生する事に
が俺を死なせて詫びとして特典もらいました

それは俺が生前彼女と共にハマっていた

『勇者王 ガオガイガー』を貰いました

でもねなんと！全ガオガイガーになれるという最高なものに！！

しかもサービズでA Iとして獅子王 凱をつけてくれました

ついでに適正はG G G S S Sの上らしいです

でもGがなんでSより上なんだ？

良いんだよ！！Gが最高なんだよ！！！！

え？身体能力は良いのかつて？

大丈夫だよ俺リアルバグチート人間って言われてて

勇者って異名有ったから

最高じゃね！？異名！！！？？

後獅子王って名字も前世からだぜ？

いや本気で

「……あつ……」

気づくと凱は紅生姜をてんこ盛りのにのせた牛丼に更に唐辛子をかけていたが

蓋が外れてドパツて感じて出た

「……いける？」

「……見せてやるさ……勇気を……」

「確かに勇氣要りそう……」

そう言つて一気に牛丼を食べる

「……ど、どう？……」

「……う、美味い！！！！」

「マジですか！？凱機動隊長！？」

「ああ！！こんな事ならゆっくり食べれば良かった……」

「お代わり準備しとくよ」
「おお！有難う！！」

クラスメイトに男子一人

どうも獅子王 聖心です

俺は今IS学園に居ます

クラス中の女子から視線を集めている状況です

『精神的に辛くないか?』

問題ない彼女の泣き顔に比べたらどうって事ない

『泣き顔に弱かったんだな』

ああこの世が終わるみたいな顔するからさ
なんかそんな顔見たくなかったんだ・・・

「し・・・獅子王君!」

『心呼んでるぞ』

「あっはい(サンキユ凱)」

俺の目の前には明らかに童顔な先生が居た

・・・女性としての部位が異常だな
興味ないけど

「あ、あの獅子王君の挨拶の番なので・・・そのお・・・」

もじもじしながら小声で俺に話す先生

「解りました

俺の名前は獅子王 聖心

年は18歳

ISが動かせると解って転入させられた者だ

趣味はお菓子作りに読書、音楽演奏主にやるのはオカリナとチェロだ

「え！？年上！」

「お兄様あゝ！！！」

「私のために愛の曲を奏でて〜！！！」

俺の周りの女子に騒がれた

『凄いなこれは』

「（凱はなかったのか？）」

『ああ俺にはなかった』

そしてSHRは終わり休み時間無しで1時間目が始まり
授業は終わった

俺が椅子に腰かけているとある奴が近づいてくる

「あの獅子王先輩？」

「君は確か・・・織班君だったかな・・・？」

「あ、そうです先輩は今までは何処の高校に行っただんですか？」

「（凱何処だったけ？）」

『藍越学園だろ？』

「（ああサンキュ）藍越学園だ」

「え！？マジですか！？俺もそこに受験しようと思ったんですけど
受験場所を間違えてIS触っちゃってここに居るって事です」

「ああなるほどISと藍越って似てるからね」

「そうですね後俺の事は一夏でいいです」

「俺の事は聖心でいい」

「はい聖心先輩」

「ちょっといいか？」

すると一人の女子が話しかけてきた

「筈？」

「話がある」

「あ、ああじゃあちょっと行ってきます聖心先輩」

「ああ、行ってこい」

一夏は彼女に連れられ教室を出て行った

そして二人は授業が始まる前に戻ってきた

そして授業がスタートした

が2時間が終了し俺が一夏と話していると・・・

「ちょっとよろしくて？」

髪がロールヘアーの女の子が話しかけてきた

「え？」

「ん？」

「まあ！なんですの！そのお返事は？」

私に話しかけられるだけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「イギリスの代表候補生セシリア・オルコット」

「あらそちらの方は知っていますのですね？」

「まあなイギリスの代表校候補生だろう」

「質問いい？」

「下々の質問に答えるのも貴族の役目ですわ」

「嫌俺は先輩に聞いたんだけど・・・代表候補生って何ですか？」

俺は解っていたが軽く呆れた
セシリアは軽く怒った

「あなた本気で仰ってるますの!?!」

「おう知らね先輩お願いします」

「はいはい簡単に言えばISの国家代表生の候補生さ
まあ傍から見ればエリートだな」

「へえ」

「そうですね!エリートですわ!貴方方とは違う入試試験で
唯一教官を倒したエリートなのです!」

「俺も倒したぞ教官」

「同じく」

「え!?!」

セシリアは声を上げた

「私だけと聞きましたか?」

「女子だけで事だろ?」

「男子は別だつて事だろ?」

ピシッ

セシリアの額に何かが走った
その時チャイムが鳴った

「くっ!覚えてらっしゃい!」

セシリアは自分の席に戻っていた

「一夏も席に戻れ」

「はい先輩」

一夏は自分の席に戻った

勇者王誕生！

先程の授業でクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは俺と一夏
それに異論を唱えたのはセシリアだった
それで俺と一夏は1週間後戦う事になった

『・・・心・・・』

「（どうした？凱？）」

『俺達の部屋ってどうなるんだろうな・・・』

「（でもさ凱は良くね？AIだし）」

『まあそうだが・・・牛井はどうしたらいいんだ・・・』

「（どれだけ好きなんだよ・・・）」

この後山田先生が来て俺は一人部屋という事になった
1026室だ

俺は廊下を歩き部屋を探す

さつきから異常に凱の機嫌がいい

一人部屋だから実体化できるからだろう

「ここか・・・」

俺はドアを開けて中に入った

・・・ゴシゴシ・・・豪華すぎじゃね？

キッチンにパソコン、ソファ、ベットその他色々
無駄に金がかかってるな

「さて食材送って置いたし飯作るか」

『俺は牛丼で』

「言わずもがなだ」

凱は栄養管理とか空腹にはならないがちゃんと食事は取る

AIなのにな

後仕込みをしている時に隣の部屋が騒がしかった

今夜の夕食は凱のリクエストの牛丼

最近なんか牛肉の消費量が半端ない気がする

月に何キロ使ってるんだろ・・・

金は神のサービスで兆を越える額があるから問題ないけどね

俺のは大盛、凱のは特大盛+てんこ盛り紅生姜+てんこ盛り唐辛子

見てるだけ口の中が酸っぱくなったり辛くなったりした

因みに凱は数回お替りをした

食い終わったら凱はホログラムモードになりベットに寝そべる

・・・データウエポンですか？

俺は自分でISのメンテをする

・・・

「うん・・・」

「どうしたんだ？」

「クラス代表を決める戦いが有るんだけど

どうも起動できるのがギャレオンとファントムガオーだけなんだ」

「ガオーマシンが使えないか・・・ちょっと厄介だな」

「ああ、ファイナルフュージョンが出来ないとするとちと厄介だ

どうもエラーが有るみたいなんだ」

「どれどれ？」

凱はAI状態に戻りガオーマシンをチェックする

『・・・これなら1週間も有れば大丈夫だ最近メンテしてなかったからな』

「そうか、つか凱なんで言ってくれなかつたんだよ？」
『・・・スマン忘れた・・・』
「まあいいや」

俺はそのままベットに入った

・・・そして1週間後・・・

一夏は幼なじみである篤に特訓を受けていたらしい
だけどほとんど剣道だったらしい
がここで問題発生

一夏の専用機がこない

「ど、どうしよう・・・」

「まあ落ち着け焦っても何も変わらない」

「獅子王、お前の専用機に來ないのだぞ？」

「いいですよもう有りますし」

「「ええ!!?」「何!?!」

「事前にもらってます」

「そ、そうか・・・」

すると山田先生が息を切らしてやって來た

「織班君！きみの・・・IS・・・が届きました・・・」

「え!?!本当ですか!?!」

「はい！これが君のIS！白式です!」

そこに有ったのは何処までも真っ白なIS

「これが・・・俺の・・・」

「獅子王お前が先やれ」

「はい、フォーマットとフィッティングですね?じゃあ・・・」

俺はギャレオンを象ったブレスレットを出す

「『ギャレオオオン』!!!」

俺が叫ぶとギャレオンが現れる

『グオオオン!!!』

「うおお!!!? ラ、ライオン!？」

「何だこいつは!!!？」

「何でいきなり!？」

「いくぞギャレオン!!!」

『グオオオン!!!』

「フュージョン!!!」

俺はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み
変形を開始

ギャレオンの頭部は胸部になり

そこから人型の頭部が現れる

前足は手となり

後ろ足は人間のように真っ直ぐとなった

そして頭部のGストーンが光る

「ガイガー!!!」

「すっげええ!!!」

「なんて展開の仕方だ・・・」

「じゃあ先にいくぞ」

俺は脚部のスラスターを吹かしアリーナに向かう
そこには既にセシリアがスタンバっていた

「あら逃げたのかと思いましたがわって全身装甲！？」フルスキン

「誰が逃げるか準備はいいか？」

「はいいつでも」

そして試合は始まった

セシリアはライフルで俺を捉えようとする

俺はスラスターを吹かし地上ギリギリで避ける

「くっ！ちょこまかと！」

「当たってやるほど俺は優しくない」

『心！』

「（なんだ凱！）」

『ステルスガオー、ドリルガオー整備完了！ライナーガオーは3分待ってくれ！！』

「了解！」

「何をブツブツと私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！！」

ビットのようなものを放ってくる

「生憎俺はダンスは苦手だ、ステルスガオー！！」

ビットの攻撃が届く寸前にステルスガオーとドッキングし攻撃を避ける

「なんなんですか！？それは！？」

「こいつはISの一部だ」

ステルスガオーで格段に向上した機動性でどんどん避けていく

そして試合開始から29分 先程から3分経った

『ライナーガオー整備完了!』

「おっしやああ!!!!ガオーマシン!!!!」

地面からはドリルガオーが顔を出した

そしてどっからからライナーガオーが出てきた

「なんなんですか!?!」

「いくぞ!!!」

ステルスガオーをパージする

「ファイナルフュージョン!!!」

腰のスラスターからGSライドのスモークを回転しながら噴出する
その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入って
くる

腰を回転させドリルガオーと連結する

腕を背に移動させ肩からライナーガオーが入る

そして背にステルスガオーがドッキングした

ギヤレオンには鬣が付けられステルスガオーから腕をドッキングし
兜が頭部に着く

「ガオ!ガイ!ガアアア!!!!」

勇者王の力

スモークが消えガオガイガーの姿がアリーナ全員の目に露になる
背についたステルス
胸部にはギャレオン
膝にはドリルがついている

「ま、まさか一次移行！？初期設定であそこまで戦ってましたの
！？」
「嫌全然違うけど・・・」

「ですがただ大きくなっただけでは私には勝てませんわ！！」

ライフルとビットを使い一点集中で攻撃してくる

「プロテクトシールド！！」

防御フィールドを展開し撃ってきたエネルギーを増幅し星の形にし
跳ね返す

それはそのままセシリアに直撃した

「きゃあ！！」

「まだまだ！！」

右腕を高速回転させながらGストーンのエネルギーを充填させる

「ブロウクンマグナム！！」

ロケットパンチのように腕を打ち出す

「な、なんですてええ!!!」

セシリアは驚きを隠せず慌しく避けるが弧を描き
ブロウクンマグナムはセシリアにヒットした

「きゃああああ!!!」

あつという間にセシリアのエネルギー残量0

試合終了勝者 獅子王 聖心

がセシリアは何故か落ちてきた

軽くスラスターを吹かし下に回りこみお姫様抱っこのように受け止めた

「大丈夫か？」

「えあ、は、はい／／／／／」

「なら良かったこのままビットに行くがいいか？」

「いえ！それでは・・・／／／／／／／／／」

顔を赤くし手をモジモジさせる

「気にするな」

俺はお構い無しにセシリアをピットを運ぶ

「ではこれでなこれから発言に気をつける」

「発言・・・ですか？」

「ああお前は国家代表生の候補生だろ？将来的に国家代表になるか
もしれん」

「そうですね」

「ならお前の発言はその国の発言になる」

お前が罵倒すれば国が罵倒したのと同じ事になる」

そう言つとセシリアの顔は青くなっていった

「そついつ事も考えるではな」

俺はピットを出た

この後原作どつりに一夏は負けた

整備室での出来事

模擬戦の後織班先生の許可を貰い

整備室でガオガイガーの整備をする事にした

まずはパソコンでガオガイガーをチェックする

・・・視線を感じる・・・

「（凱・・・）」

『ああ誰か見ている』

俺は振り向くと水色の髪に眼鏡を掛けている女の子がいた

「何の用だ？」

「・・・を・・・く・・・」

「何？」

「貴方の名前を・・・教えてください・・・」

「俺の？俺は獅子王 聖心だ」

とりあえず自己紹介

「更識・・・簪」

「君の名前かい？」

「コケツ」

「じゃあ更識・・・さん？」

「フルフル・・・簪でいいです・・・」

「簪ね、で何の用？」

「・・・その・・・オルコットさんとの模擬戦を見て・・・」

獅子王さんのISがアニメのロボットのみたいだで格好良いから・・・

その・・・もつと見たくて・・・／／／

簪は頬を赤くする

「まあガオガイガーの元はアニメだしな」

「!! なの・・・?」

「うん・・・口で言うより見てもらった方が早いかな?

まあこの後あいてるか?」

「コケッ」

「なら俺の部屋でそのアニメ見ないか?」

「!! いいの・・・?」

「ああ構わんぞ」

「ありが・・・とう／／それと・・・ISが見たい・・・」

「ああ解った」

俺はガオガイガーを合体状態で呼び出す

「!!」

簪は目をとても輝かせている
キラキラしてる

「好きなだけ見ていいぞ俺は整備してるから」

「! これを! ?」

「ああまあな」

「私も・・・手伝っていい・・・?」

「あ、ああ」

俺はエネルギー系統を担当し簪は装甲を担当した

簪のおかげでだいぶ早く終わった

この後簪と俺の部屋で勇者王 ガオガイガーを鑑賞した

「!!!…い、いい…キラキラ…」

「おお!解ってくれるか!」

「勇気…いい…」

「くう!解ってくれる人が居て良かった!」

「出る!」

『ヘル・アンド・ヘブン!』

「来るぞお!」

『ギム・ギル・ガン・ゴー・グフォ…』

この後徹夜で俺達はガオガイガーを鑑賞するのであった
簪が帰った後軽く凱に怒られた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410y/>

IS(インフェニット・ストラトス) 勇者光臨

2011年11月29日02時48分発行